

一度は見ておきたい重要文化財シリーズ

滋賀の旅編 その1



今回は「一度は見ておきたい重要文化財シリーズ・滋賀の旅編」と題し、歴史的価値、学術的価値の高い石仏や石塔をご紹介します、その魅力に迫っていきます。

観光情報も添えていますので、ぜひ実際に足を運んでいただき、その雰囲気を感じ、目で楽しみ、心で歴史に触れてみてはいかがでしょうか？

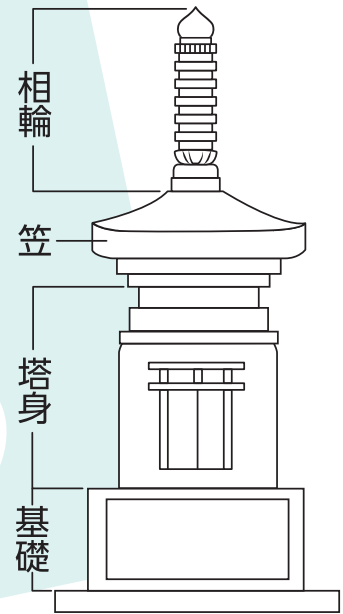
正法寺石造宝塔（滋賀県蒲生郡日野町鎌掛）

正法寺(しょうぼうじ)は、滋賀県蒲生郡日野町にある、十一面観音菩薩を本尊とする臨済宗妙心寺派の寺院です。もとは八坂神社の脇にあった観音堂を、元禄5年(1692年)に普存(ふぞん)という禅僧が、現在の地に移して再興しました。

境内には、京都の仙洞御所から移されたという藤の苗が植えられ、樹齢は300年を超えています。

この藤の品種は「ノダフジ」で、正法寺山はその昔「後光山(ごこうざん)」と呼ばれていたため、その名をとって「後光藤(ごこうふじ)」と呼ばれています。

なお、本堂は文化11年(1814年)に再建され、境内は明治初期に整備されました。その本堂の山手に、国の重要文化財に指定されている石造宝塔があります。



宝塔とは

宝塔は、大日如来や法華経の安置を目的として建てられた仏塔です。

筒型もしくは瓶や壺型の柱(塔身)の上に一重の笠(屋根)が乗り、笠の上に相輪(仏塔の頂上の飾り)を立てたものです。なお、石でつくられた宝塔は平安時代から江戸時代に数多く作られています。

相輪とは

五重の塔など仏塔の最上部にある部分のことを相輪(そうりん)といいます。インドの仏塔の傘蓋(さんがい)が発展したものです。

相輪は、上から宝珠(ほうじゅ)・竜舎(りゅうしゃ)・水煙(すいえん)・九輪(くりん)・請花(うけばな)・伏鉢(ふくばち)・露盤(ろばん)で構成されます。また、九輪のみを指すこともあります。

特 徴

花崗岩製で、塔高は約2.75m。切石の基壇の上に建立されています。基礎は4面とも輪郭を巻き、格狭間(こうざま)と呼ばれる装飾が入り、正面のみ開花蓮が浮き彫りにされています。

塔身は胴部に扉形の線が刻まれ、上方には縁が作られ、首部は太く作られ2段あります。屋根は軒付が厚くて勾配はゆるく作られ、相輪の請花や宝珠なども美しい作りです。



歴 史

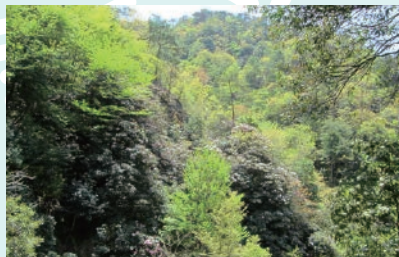
塔身背面に「正和二二年」の刻銘があり、鎌倉時代後期・正和4年(1315年)の作であることが明らかになっています。「四年」を「二二年」としているのは、四が死につながるためと考えられています。

なお、1960年2月9日に国の重要文化財に指定されました。



正法寺の本尊である十一面観世音菩薩は、33年に一度の開帳がある秘仏であり、昔から安産の守護仏として深く信仰されています。

また正法寺は別名「藤の寺」とも呼ばれ、房の長さは1m以上にもなり、毎年5月上旬～中旬には、美しい花を棚いっぱい咲かせます。



花の名所は他にもあり、同じ日野町鎌掛には約4万平米に及ぶホンシャクナゲの群生地があります。標高350m前後の山間に約2万本が自生していて、国の天然記念物に指定され、4月下旬から5月上旬にかけて花が咲く姿を楽しめます。

交通アクセス

〈鉄 道〉近江鉄道本線・日野駅からバスで25分「鎌掛」停留所下車
〈自動車〉名神「八日市IC」より国道421・307号経由で約25分
新名神高速「甲賀土山IC」より国道1号経由で約20分